出会い（その五）

燕木寿江

何時も　永遠の光を
少年の様に　見つめていた
周郷先生
今はその光の中で
やすらいでいらっしゃる事を
確信致します

武市八十雄

＊

蠟燭のゆれる灯の中で、花柄でふちどられた小さな紙片の文字がほのかに見えた。私は縋りつく思いで顔を近づけた。

「少年の様に……少年の様に――」中国にいらっして魯迅の家の所で写した写真を、自ら、「少年の様でしょう」と言われた事が脳裏をかすめた。先生は「幼な子が眠っていくように死にたいものですね」と話されたことがあった。

市ヶ尾幼稚園にご講演にいらっしゃったのが一月十四日、そして亡くなられたのが、二月二十八日――。あの日も咳をしていらっし

やった。

――雪の中を――

「今月の十四日に市ヶ尾へ来て話を―、というように考えていましたからね。昨日からそわそわして落ちつかないの。だって、僕の話を聞こうと思って集まる人がいてね。あそこにいる畳屋の人みたいにさ、ここには僕の言うことをよくわかってくれる人がいるのよね。これ恐ろしいんだな。いい加減なこと言えないじゃないの」

「読んだり考えたりしてきたけども、僕という一人の人間がいかに無価値な人間かなと思うことあるね。皆さんもあるんじゃない？ これ程低級なつまらない人間は無いと思うことあるだろう？ 僕だけじゃないでしょうねえ。昨日はそういう気持でした。それじゃとっても市ヶ尾へ行っても話すことはできないなあ、と思ってね。雪の中一人で、小田原まで三冊の本買おうと思って行って来たのね。ところが、家を出てから駅に行くまで、（渋沢の駅まで二十分余り歩く）そして小田急の電車に乗っている間も、ずーっと咳が出っぱなしでね。苦しくて、苦しくて、そしたらその三冊の本無いんですよ。駅のアートコーヒーに入って二百五十円のコーヒー飲んで、『世界』の一月号買ったけれども、あまりおもしろくないね。それ読んで少し気持ちが落ちついて帰ってきました。帰ってきてもまだ気持はちっともはればれしないんですけれどね。今朝は、七時から起きてどういうように話そうかな、と思って、一生懸命読んだりなんかしてたんだけれども、あんまり読むと駄目になっちゃうからね。急場に読むって言うのは、間に合わせじゃ駄目なのね。いつか、昔読んだのが忘れた頃になって、あっ、これ

だ――、とこう気がつくんだといいんだけどね」

一つの小さな片隅の幼稚園で話すことに、これだけの時間とエネルギーと……言いかえればご自分の生命を注いでいる先生がどこにいらっしゃるだろう――。どこの会場でも、その相手が誰であれ、少人数であっても何でも、先生の全身からほとばしるような声には変りはない。「話というものは、一度口から出した時が生命があって、繰り返えしはぬけがらのようなものだ」と言われたことがある。あまりにも多様化した現在、寄りどころを求めてか、(他力本願も困るが)講演会がやたらに流行している。講師の話の内容が、二度、三度と全く同じことが多々ある。幼児教育の本質は時代と共に変わるものではないので、当然だと思うこともあるし、又、何度も同じことを聞くことによって、理解できることもあるが、しかし、先生はいつも相手の人格を尊重し、その時のご自分の思いのすべてを、一人、一人に生命を与えるように語られる。

――精神は不滅である――

この日、お迎えの車の中でも私は自分から一言も話さなかった。日頃の疑問はいくらでもあるが、先生ご自身が今、巡らしていらっしゃる思考の妨げをしてはならず、緊張で固くしまった口は開けなかった。

そおっとお隣で一時間余り座っていると、「蕪木さん、著作集の装幀は東山さんに頼みたいんだけど、僕みたいのが訪ねて行って大切な時間をつぶしたくないからね」とおっしゃった。この言葉がまだ耳元に残っているのに、著作集の完成をみないで亡くなられたとは誰も信じられなかった。二月十六日にはお

茶大の附属幼稚園にみどり会主催の講演会にいらっしゃり、「あなたは春をほんとうに感じていますか」と言われ「春が来た」を皆で歌った。「理屈がわかっていても、感性が生きてなければ実際には生きてこない」と言われた。

十八日には、谷内こうたの個展を見に丸善に行かれ、そのあと、一高、東大時代の友人である福島要一、川上貞司両氏と丸善の地下でコーヒーを飲みながら久しぶりに話された由、その折に「肉体は滅びても、精神は不滅である」と、周郷先生が話されたと伺う。まさに精神は宇宙の中に永遠に残るであろうことを確信されての最後の言葉であった。

二十七日の夜、小田原の病院に行く車の中でも、窓によぎる景色に自然破壊を嘆かれ、抗議されるなど気力で生きていらっしゃったように拝察される。カーテンで仕切られた四人部屋で、苦しい咳の為に眠ることもできず朝を迎えられた。点滴の針も酸素吸入も自らはずし、異物が体の中に入ることをこばんだ。元気に会話している入院患者に、医者に頼り、薬に頼るより、自分の中にある生きる力が大切なのだと小声で訴えておられ、病院には三日以上いたくない、と看護する奥様に話し、個室に移されて、その日の一時三十分にやすらかに永眠なさった。ヨーロッパから帰っていらっしゃった秋にも肺炎を患い、高熱をだしても薬も飲まず、新鮮な空気と野菜、そして生きようとする力を助ける奥様の不朽の愛が、先生を助けられたのだろうと思う。

ご逝去の電話に、間違いであればよいがと同僚とかけつけた時には、泣きはらした喪服の人達が山道を帰って行くところだった。やっぱり本当なのか？　足がすくんで前にでな

い。泣き伏していらっしゃる奥様に言葉もなくオーバーをそっとかけた。石のように冷たかった。「先生のところにいってきてね」と、やっと言われた。周郷先生は片眼を開けてじっと見ていらっしゃった。黒く光った眼であった。私は丹沢の山波に向って絶叫した。

「――周郷先生――」一瞬、黒い闇がビシビシと動いたように思えた。雨もやんで、夜空いっぱいの星が降ってくるようだった。

次の日、ご父兄が子どもの日記の一頁を見せてくださった。

約束します
すごう先生、どうしてお亡くなりに
なったのですか……
一月に市ヶ尾にいらっしたばかりなのに…
いい人はなぜ、早く世を去ってしまうので
すか？
きらいだから？
いやになったから？
あきてしまったから？
たまらなくこの世がにくくなりました
夜ばかりの感じのところをさまようのだっ
たら　おやめになって生きかえって
おねがい――
先生の死をむだにしたくない
お母さんがこんなに悲しんでいます
いつまでも　わかわかしく元気で
私達を見守って下さい
先生のお話を守って生きていきます
約束します　　涙がとまりません
新星が一つ生まれるでしょうね
先生の光として見ています

先生の知らないひろみより

（卒園生・四年生）

ひろみちゃん
すごう先生は　子どもがだいすきです
子どもは正直で　嘘がないからです
すごう先生は自然がだいすきです
自然は正直で　嘘をつかないからです
子どもは自然の中から生まれてきたのです
自然の美しさを一番知っているのは
子どもでしょうし
自然のきびしさを肌で知っているのは
子どもです
　お日様の暖かさも
　春に降る雪の冷たさも
　夕日のさびしさも……

すごう先生は　その自然に戻ってゆかれたのです
　自然から生まれ
　自然によって育ち
　宇宙を愛し
　自然に帰って行かれたのです
　先生のだいすきな自然の中に……

ひろみちゃん　泣かないで――
先生はいつでも傍にいらっしゃる
　犬ふぐりのるり色の小さな花の中に
　白い梅の古木の中に
　吹きでるみどりの新芽の中に
自然を美しいと感じる人の心の中には
先生はいつでも生きていらっしゃる

＊至光社社長
＊「幼児の教育」七十八巻九号、著作集第一巻に収録されている。

（市ヶ尾幼稚園）